

「主の祈り」

2023年06月21日

そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう祈りなさい。『父よ / 御名が聖とされますように。御国が来ますように。私たちに日ごとの糧を毎日お与えください。私たちの罪をお赦してください。私たちも自分に負い目のある人を / 皆赦しますから。私たちを試みに遭わせないでください。』」（ルカ11：2～4）

主イエスはある所で祈っておられた。祈り終わられると、一人の弟子が、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください」と言った。洗礼者ヨハネが弟子たちに祈りを教えていたようで、主イエスの弟子である自分たちにも祈りを教えてくださいと、謙虚に教えを乞うている。それに応え、「祈るときには、こう祈りなさい」と言われ、教えてくださいと。この祈りは、主イエスが教えてくださった祈りだから「主の祈り」と言い、その後の教会において最も大事な祈りとして伝承されている。主の祈りは、マタイ福音書6章の「山上の説教」の中でも、教えておられる。マタイ福音書とルカ福音書では、言葉が多少違っているが、ルカ福音書の記述に沿って、説明したい。

まず「父よ」と呼びかける。「父」という言葉は、旧約聖書では威厳に満ちた「父権的」な響きが見られる。そこで「親なる神」とか「父母（ちちはは）なる神」という呼びかけにするという議論がある。しかし、主イエスの呼びかけの「父」はアラム語の「アッパ」で、幼子の「父ちゃん」と言う呼びかけと同じで、権威ある父権性とはほど遠い。主イエスは、神を「父ちゃん」と幼子のように呼びかけて、祈りなさいと言われた。

ルカ福音書の「主の祈り」は五つの祈りから成っている。①「御名が聖とされますように。」「御名」とは神の名で、名は体を表し、神ご自身を指す。「聖」とは他とははっきり区別されることである。神が他のものと区別され、神ご自身として崇められますようにという祈りである。神が聖とされる時、地にある人間は罪あるものとして認識される。神と人間の立ち位置が確認される。これが祈りの始め、そして、祈りの基本である。②「御国が来ますように。」「御国」とは神の御心が充満、支配している所である。神の愛と真実が支配している国が、私たち人間の世界にも到来してくださいという祈りである。不義と理不尽に満ちた世界に生きている人間にとって、切なる求めである。③「私たちに日ごとの糧を毎日お与えください。」食べ物人間が命を支える。命の基である日ごとの食べ物を求める祈りである。この祈りには、食べ物は神が与えてくださるという認識がある。神が与えてくださる食べ物だから、独り占めせず、分かち合って食べようとする姿勢が生まれてくる。④「私たちの罪をお赦してください。私たちも自分に負い目のある人を / 皆赦しますから。」負い目ある人を赦しますから、私の罪を赦してくださいという祈りである。私たちは自分に負い目のある人を赦することができない。だから、赦しますから、赦してくださいとはとても祈れないと思う。主イエスは、人は皆赦せないことを十分ご存じでありながら、なお、こう祈れと言われる。私たちは、自分の弱さに留まらず、主イエスが祈れと言われた言葉で祈っている。それが喜びであり、また、祈りが、赦せる者へと私たちを導いてくださるのである。⑤「私たちを試みに遭わせないでください。」私たちが生きている現実、悪へと誘う誘惑で満ちている。これに負けて、悪にのめり込んで、苦悩を味わう。そのような試みに遭わせないでくださいという祈りである。簡潔な五つの祈りに、私たちに必要な全てが含まれている。主イエスは、この祈りを祈りなさいと教えられた。